

銀河鉄道の夜

みやざわ けんじ
宮沢 賢治

一、午後 of 授業

「では皆さんは、そういうふう川だといわれたり、乳の流れた跡だといわれたりしていたこのぼんやりと白いものが本当は何かご承知ですか。」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどを指しながら、みんなに問いをかけました。カムパネルラが手を上げました。それから四、五人手を上げました。ジョバンニも手を上げようとして、急いでそのままやめました。確かにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、この頃はジョバンニはまるで毎日教室でも眠く、本を読む暇も読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがあるのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのですしょう。」

ジョバンニは勢いよく立ち上がりましたが、立ってみるともうはっきりとそれを答えることができなかったのでした。ザネリが前の席から振り返って、ジョバンニを見てくすと笑いました。

ジョバンニはもうどきまぎして真っ赤になってしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると銀河はだいたい何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが今度もすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困った様子でしたが、目をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手を上げたカムパネルラが、やはり同じもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさん小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニは真っ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの目の中には涙がいっぱいになりました。そう僕には知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラと一緒に読んだ雑誌の中にあっただ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から大きな本を持ってきて、ぎんがというところを広げ、真っ黒なページいっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、この頃僕が、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんななどはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまりものを言わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、自分もカムパネルラも哀れなような気がするのです。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川が本当に川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川の底の砂や砂利の粒にも当たるわけです。またこれを大きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星は皆、乳の中にまるで細かに浮かんでいる脂油の球にも当たるのです。そんなら何がその川の水に当たるかといえますと、それは真空という光がある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりその中に浮かんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水の中にすんでいるわけです。そしてその天の川の水の中から四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見えましたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をご覧下さい。」

先生は中にたくさん光る砂の粒の入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光る粒がみんな私どもの太陽と同じように自分で光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中頃にあって地球がそのすぐ近くにあるとします。皆さんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見回すとしてごらん下さい。こっちのほうはレンズが薄いので僅かの光る粒すなわち星しか見えなんでしょう。こっちやこっちのほうはガラスが厚いので、光る粒すなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話しします。では今日はその銀河のお祭りなのですから皆さんは外へ出てよく空をご覧下さい。ではここまでです。本やノートをおしまい下さい。」

そして教室中はしばらく机の蓋を開けたり閉めたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木の所に集まっていました。それは今夜の星祭りに青い明かりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出てきました。すると町の家々では今夜の銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝に明かりをつけたりいろいろ支度をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲がってある大きな活版所に入っすぐ入り口の計算台にいただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴を脱いで上がりますと、つきあたりの大きな戸を開けました。中にはまだ昼なのに電灯がついてたくさんの輪転機がぼたりぼたりと回り、きれで頭を縛ったりランプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入り口から三番めの高いテーブルに座った人のところへ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚を探してから、

「これだけ拾っていけるかね。」と言いながら、一枚の紙きれを渡しました。ジョバンニはその人のテーブルの足もとから一つの小さな平たい箱を取り出して向こうの電灯のたくさんついた、立て掛けてある壁の隅の所へしゃがみこむと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾い始めました。青い胸当てをした人がジョバンニの後ろを通りながら、

1 【活版所】印刷を行う所。

棚に並べられた活字という文字や記号の型を選び（拾うという）、箱に並べたものを活版といい、それを印刷していた。

4 【烏瓜】山野に生える落葉つる草。秋の終わり頃に赤い実がなる。

6 【いちいの葉の玉】いちいの葉を玉の形に編んだもの。いちいは、深山に生える常緑高木。

10 【輪転機】印刷原版を取り付けた丸い筒に、もう一つの筒を押しつけ、その間に紙を挟んで筒を回転させて刷る印刷機。

11 【きれ】布。

11 【ランプシェード】ランプシェードハット。文字版に髪の毛が入らないようにかぶった帽子。ランプのかさのような形をしている。

「よう、虫めがね君、おはよう。」と言いますと、近くの間、五人の人たちが声もたてずこっちも向かずに冷たく笑いました。

「ジョバンニは何遍も目を拭いながら活字をだんだん拾いました。」

六時が打ってしばらくたった頃、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもう一度手に持った紙きれと引き合わせてから、さっきのテーブルの人へ持ってきました。その人は黙ってそれを受け取ってかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをするとう戸を開けてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱり黙って小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニはにわか顔色がよくなって威勢よくおじぎをするとう台の下に置いたかばんを持って表へ飛び出しました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢いよく帰ってきたのは、ある裏町の小さな家でした。その三つ並んだ入り口のいちばん左側には空き箱に紫色のケールやアスパラガスが植えてあって小さな二つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「おっかさん。今帰ったよ。ぐあい悪くなかったの。」ジョバンニは靴を脱ぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。私はずうとぐあいがいいよ。」

ジョバンニは玄関を上がっていきますとジョバンニのお母さんがすぐ入り口の部屋に白いきれをかぶって休んでいたのです。ジョバンニは窓を開けました。

「おっかさん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、おまえ先にお上がり。あたしはまだ欲しくないんだから。」

「おっかさん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時頃帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「おっかさんの牛乳は来ていないんだらうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「僕行って取ってこよう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからおまえ先にお上がり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いていったよ。」

「では僕食べよう。」
ジョバンニは窓のところからトマトの皿を取ってパンと一緒にしばらくむしゃむしゃ食べました。

「ねえおっかさん。僕お父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大変よかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲羅だのとなかいの角だの今だってみんな標

本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持っていくよ。一昨年修学旅行で

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着を持ってくると言ったねえ。」

「みんなが僕に会うとそれを言うよ。冷やかすように言うんだ。」

「おまえに悪口を言うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、ちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんは僕を連れてカムパネルラのうちへも連れていったよ。あの頃はよかったなあ。僕は学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標の明かりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油を使ったら、缶がすっかりすすけたよ。」

「そうかねえ。」

「今も毎朝新聞を回しに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。尻尾がまるで箒のようだ。僕が行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとうついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜の明かりを川へ流しに行くんだって。きっと犬もついていくよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ。」

「うん。僕牛乳を取りながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へは入らないでね。」

「ああ僕岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒に心配はないから。」

「ああきっと一緒だよ。おっかさん、窓を閉めておこうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね。」

「ジョバンニは立って窓を閉めお皿やパンの袋を片づけると勢いよく靴を履いて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と言いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

「ジョバンニは、口笛を吹いているような寂しい口つきで、檜の真っ黒に並んだ町の坂を下りてきたのでした。」

坂の下に大きな一つの街灯が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんどん電灯の方へ下りていきますと、今まで化け物のように、長くぼんやり、後ろへ引いていたジョバンニの影法師は、だんだん濃く黒くはっきりなって、足を上げたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へ回ってくるのでした。

「僕は立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。僕は今その電灯を通り越す。そうら、今度は僕の影法師はコムパスだ。あんなにくるると回って、前の方へ来た。」

3 【ラッコの上着】ラッコの毛皮で作った上着。

12 【アルコールランプ】アルコールランプ。小型の加熱器具。

12 【アルコールランプで走る汽車】鉄道模型で、汽車は、アルコールランプの熱を動力源にして走る。

13 【信号標】信号に用いる目印。

18 【コムパス】コンパス。

とジョバンニが思いながら、大股おまたにその街灯の下を通り過ぎたとき、いきなり昼間のザネリが、新しい襟えりのどがったシャツを着て電灯の向こう側の暗い小路こうじから出てきて、ひらっとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜からすうり流しに行くの。」ジョバンニがまだそう言ってしまううちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着かみそりが来るよ。」その子が投げつけるように後ろから叫さけびました。

ジョバンニは、ぱっと胸が冷たくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「なんだい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫さけび返しましたがもうザネリは向こうのひばの植わった家の中へ入っていました。

「ザネリはどうして僕ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるでねずみのようになくせに。僕ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの明かりや木の枝で、すっきりきれいに飾かざられた街を通っていきました。時計屋の店には明るくネオン灯がついて、一秒ごとに石でこされたふくろうの赤い目が、くるくると動いたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚いガラスの盤ばんに載のって星のようにゆっくり巡めぐったり、また向こう側から、銅の人馬がゆっくりこちへ回まわってきたりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉はで飾かざってありました。

ジョバンニは我を忘れて、その星座の図に見入りました。

それは昼学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合わせて盤ばんを回すと、そのとき出ている空がそのまま楕円形だえんけいの中に巡めぐって現れるようになっておりやはりそのま

ん中には上から下へかけて銀河がぼうと煙けむったような帯になってその下のほうではかすかに爆発

して湯気でもあがっているように見えるのでした。またその後ろには三本の脚あしのついた小さな望遠鏡が黄色に光って立っていましたし、いちばん後ろの壁かべには、空中の星座を不思議な獣けものや蛇へびや魚や瓶びんの形に書いた大きな図が掛かかっていました。本当にこんなようなさそりだの勇士ゆうしだの空にぎっしりいるだろうか、ああ僕はそこをどこまでも歩いてみたいと思ったりしてしばらくぼんやり立っていました。

それからにわかにおっかさんの牛乳のことを思い出してジョバンニはその店を離はなれました。そして窮屈きゅうくつな上着かたの肩かたを気にしながらそれでもわざと胸を張ふって大きく手を振ふって町を通っていききました。

空気は澄すみきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街灯は皆真みなっ青なもみや檜ひのきの枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中にたくさん豆電灯がついて、本当にそこらは人魚の都のように見えるのでした。子供らは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛くちふえを吹ふいたり、

「ケンタウルス、露つゆを降ふらせ。」と叫さけんで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃やしたりして、楽しそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂たれて、そこらにぎやかさとはまるで違ちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町外れのポプラの木が幾本いくほんも幾本いくほんも、高く星空に浮うかんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂においのする薄暗うすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子ぼうしを脱ぬいで、「こんばんは。」と言いましたら、家の中はしんとして誰もいたようではありませんでした。

8 【ひば】ヒノキ科の常緑高木。

13 【ネオン灯】ガラス管にネオンガスなどを入れて電気を流し、発光させるもの。

14 【こさえる】「こしらえる」のくだけた言い方。

10 【もみ】山野に生える常緑高木。若木はクリスマスツリーとして用いられる。

11 【檜】低山や平地に生える落葉高木。どんぐりがなる。

11 【電気会社】電力を供給する会社。

11 【プラタヌス】プラタナス。スズカケノキ科の落葉高木。

14 【マグネシヤ】マグネシウム。

17 【ポプラ】街路樹などにする落葉高木。

「こんばんは、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年とった女の人が、どこかぐあいが悪いようにそろそろと出てきて何か用かとの中で言いました。

「あの、今日、牛乳が僕とこへ来なかったの、もらいにあがったんです。」ジョバンニが一生懸命勢いよく言いました。

「今誰もいないでわかりません。あしたにしてください。」

その人は、赤い目の下のところをこすりながら、ジョバンニを見下ろして言いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少ししてから来てください。」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとう。」ジョバンニは、おじぎをして台所から出ました。

十字になった町の角を、曲がろうとしましたら、向こうの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六、七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の明かりを持ってやってくるのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞き覚えのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきどきとして戻ろうとしましたが、思い直して、いっそう勢いよくそっちへ歩いていきました。

「川へ行くの。」ジョバンニが言おうとして、少し喉がつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。ジョバンニは真っ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行き過ぎようと思いましたら、その中にカムパネルラがいたのです。カムパネルラは氣の毒そうに、黙って少し笑って、怒らないだろうかとい

うようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、逃げるようにその目を避け、そしてカムパネルラの背の高い形が過ぎていってまもなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町角を曲がる時、振り返って見ましたら、ザネリがやはり振り返って見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こうにぼんやり見えている橋の方へ歩いていってしまったのでした。ジョバンニは、なんともいえず寂しくなって、いきなり走りだしました。すると耳に手を当てて、わああといいながら片足でびよんぴょん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニがおもしろくて駆けるのだと思ってわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

五、天気輪の柱

牧場の後ろは緩い丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連なって見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林の小道を、どんどん上っていきました。真っ暗な草や、いろいろな形に見えるやぶの茂みの間を、その小さな道が、一筋白く星明かりに照らし出されてあったのです。草の中には、ぴかぴか青光りを出す小さな虫もいて、ある葉は青く透かし出され、ジョバンニは、さっきみんなの持っていた烏瓜の明かりのようだとも思いました。

その真っ黒な、松や檜の林を越えると、にわかにかがらんと空が開けて、天の川がしらしらと南から北へ渡っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見分けられたのでした。つりがねそうか野菊の花が、そこら一面に、夢の中からも香りだしたというように咲き、鳥が一匹、丘の

10 【大熊星】おおぐま座。
17 【つりがねそう】釣り鐘の
ような形の花が咲く植物。

上を鳴き続けながら通っていききました。

ジョバンニは、頂いただきの天気輪てんきりんの柱の下に来て、どこかする体を、冷たい草に投げました。

町の明かりは、闇やみの中をまるで海の底のお宮の景色のようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫びさけ声もかすかに聞こえてくるのでした。風が遠くで鳴り、丘おかの草も静かにそよぎ、ジョバンニの汗あせでぬれたシャツも冷たく冷やされました。ジョバンニは町の外れから遠く黒く広がった野原を見渡みわたしました。

そこから汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、りんごをむいたり、笑ったり、いろいろなふうに行っていると考えますと、ジョバンニは、もうなんともいえず悲しくなって、また目を空に上げました。

あああの白い空の帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ても、その空は昼先生の言ったような、がらんとした冷たいとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられてしかたなかったのです。そしてジョバンニは青い琴ことの星が、三つにも四つにもなって、ちらちらまたたき、脚あしが何遍なんべんも出たり引ひっ込んだりして、とうとうきのこのように長く伸びるのを見ました。またすぐ目の下の町までがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集まりか一つの大きな煙けむりかのように見えるように思いました。

15

六、銀河ステーション

そしてジョバンニはすぐ後ろの天気輪てんきりんの柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく

18 【三角標】三角測量の際に目印として用いられた「測標」のことだとされる。

く螢ほたるのように、ペカペカ消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはっきりして、とうとうりんど動かないようになり、濃い鋼青こうせいの空の野原に立ちました。今新しく焼いたばかりの青い鋼はがねの板のような、空の野原に、まっすぐにすきと立ったのです。

するとどこかで、不思議な声が、銀河ステーション、銀河ステーションと言う声がしたと思うといきなり目の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万ひゃくまんの螢ほたるいかの火をいっぺんに化石させて、空中そらじゅうに沈しずめたというぐあい、またダイヤモンド会社で、値段が安くならないために、わざとれないふりをして、隠かくしておいた金剛石こんごうせきを、誰たれかがいきなりひっくり返して、ばらまいたというふうに、目の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何遍なんべんも目をこすってしまいました。

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走り続けていたのです。本当にジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色の電灯の並んだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青いピロイドを張った腰掛こしかけが、まるでがら空きで、向こうのねずみ色のワニスを塗ぬった壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたように真っ黒な上着を着た、背せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてその子供の肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰たれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこ

ちも窓から顔を出そうとしたとき、にわかにもその子供が頭を引ひっ込こめて、こっちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、君は前からここにいたのと言おうと思ったとき、カムパネルラ

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走り続けていたのです。本当にジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色の電灯の並んだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青いピロイドを張った腰掛こしかけが、まるでがら空きで、向こうのねずみ色のワニスを塗ぬった壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたように真っ黒な上着を着た、背せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてその子供の肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰たれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこ

ちも窓から顔を出そうとしたとき、にわかにもその子供が頭を引ひっ込こめて、こっちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、君は前からここにいたのと言おうと思ったとき、カムパネルラ

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走り続けていたのです。本当にジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色の電灯の並んだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青いピロイドを張った腰掛こしかけが、まるでがら空きで、向こうのねずみ色のワニスを塗ぬった壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたように真っ黒な上着を着た、背せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてその子供の肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰たれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこ

20

5 【螢ほたるいか】イカ的一种。発光する。

5 【化石させる】石のように動かなくする。

6 【ダイヤモンド】ダイヤモンド。

7 【金剛石】ダイヤモンドのこと。

12 【ピロイド】つやがあって滑らかな手触りの布。

13 【ワニス】樹脂をアルコールや油で溶かした透明な塗料。ニス。

13 【真鍮】銅と亜鉛の合金。

15

10

が

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と言いました。

ジョバンニは、(そうだ、僕たちは今、一緒に誘って出かけたのだ。) と思いながら、

「どこかで待っていてよいか。」と言いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう言いながら、少し顔色が青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちで黙ってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢いよく言いました。

「ああしまった。僕、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥の停車場だから。僕、白鳥を見るなら、本当に好きだ。川の遠くを飛んでいたって、僕はきっと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐる回して見ていました。まったくその中に、白く表された天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどっていくのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のように真っ黒な盤の上に、いちいちの停車場や三角標、泉水や森が、青や緑や、美しい光で散りばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たように思いました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが言いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、僕銀河ステーションを通ったろうか。今僕たちのいるとこ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場の印の、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀色の空のすすきが、もうまるで一面、風にさらさらさらさら、揺られて動いて、波をたてているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは言いながら、まるで跳ね上がりたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生懸命伸び上がって、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりも透きとおって、ときどき目のかげんか、ちらちら紫色の細かな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら、声もなくどんどん流れていき、野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が、美しく立っていました。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものはだいたいや黄色ではっきりし、近いものは青白く少しかすんで、あるいは三角形、あるいは四辺形、あるいは稲妻や鎖の形、さまざまに並んで、野原いっぱい光っているのでした。ジョバンニは、まるでときどきして、頭をやけに振りまわりました。すると本当に、そのきれいな野原中の青やだいたいや、いろいろ輝く三角標も、てんでに息をつくように、ちらちら揺れたり震えたりしました。

「僕はもう、すっかり天の野原に来了。」ジョバンニは言いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手を突き出して窓から前の方を見

13 【停車場】「駅」の古い言い方。

15 【二条】一本。

19 【黒曜石】火山岩の一種。黒くてガラスのような石。

13 【燐光】ある物体に光を当てて、その光を取り去ってもまだ光を発すること。

16 【やけに】ひどく。

ながら言いました。

「アルコールが電気だろう。」カムパネルラが言いました。

「ごとうごとうごとう、その小さなきれいな汽車は、空のすすきの風に翻る中を、天の川の水や、三角点の青白い微光の中を、どこまでもどこまでもと、走っていくのでした。」

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして言いました。

線路のへりになった短い芝草の中に、月長石^{げつちようせき}でも刻まれたような、すばらしい紫^{むらさき}のりんどうの花が咲いていました。

「僕^{ぼく}、飛び降りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸を躍^{わど}らせて言いました。

「もうだめだ。あんなに後ろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう言ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎていきました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんの黄色な底をもったりりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、目の前を通り、三角標の列は、煙^{けむ}るように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

〈出典 『宮沢賢治コレクション1 銀河鉄道の夜』(筑摩書房、二〇一六年)〉

7 【月長石】長石の一種。乳白色、半透明のものが一般的。ムーンストーン。

【著者】宮沢賢治(みやざわけんじ)

一八九六(明治二九)年—一九三三(昭和八)年

詩人。童話作家。岩手県の生まれ。

【著書】『春と修羅』『風の又三郎』『オツベルと象』『注文の多い料理店』など